

地域社会の歴史と文化を育むブタ飼養： 中国福建省客家の「菜猪」とイベリア半島における イベリコ豚を事例として

野 林 厚 志 (国立民族学博物館)

Nobayashi A. (2011) Feeding pig as the cultural and historical resource for the local community: Examining 'tsweky' of a Hakka village in Fujian, mainland China and Iberian pig in Iberian Peninsula

All about SWINE 39, 17-22

1. 問題の所在

本稿の目的は、中国福建省の地方都市におけるブタの飼養の事例とイベリア半島におけるブタ飼養の事例を紹介しながら、地域社会の歴史と文化を育む営みにブタが一定の役割を果たしていることを紹介することである。

ブタはユーラシアの東部と西部とで別々に家畜化されたと考えられている。ユーラシア西部における家畜化は「肥沃な三日月弧」すなわち、現在のイラン西部からシリア北部にかけての地域で約 8500 年前に起こったと考えられている。一方、東部では中国大陸の随所で新石器時代以降の遺跡にブタと同定される骨が見つかっている。イノシシからブタへの家畜化の成功は人間と *Sus* 属動物との関係を大きく変えた。狩猟活動によってしか捕獲できず、時には畑を荒らし害獣ともなるイノシシと異なり、ブタは人間にとって確実な食糧の蓄えとなる存在となってきた。

ユーラシアの各所でブタが飼養されていった結果、ブタは地域社会において様々な社会的位置づけをされてきた。肯定的な評価、すなわち、正の

象徴化ともいふべき現象は、ブタが幸福や財産を象徴する動物とみなされたり、豚肉やブタの生体、歯牙や頭蓋骨といった体の一部が婚資や贈答品、威信財として機能したりすることで表される。一方で、豚肉食への拒絶は、西アフリカから南アジア、東南アジアにいたる各地域で見られ、それらはもっぱら、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教と結びついてきた。ブタに対する肯定的な評価と負のイメージの存在、いわば二面価値性は、ヨーロッパから南アジアにかけてのユーラシアの西部社会では宗教的、イデオロギー的対立と結びつけながら説明されることが多かったと言えるだろう (ダネンベルグ 1995, ファーブル＝ヴァサス 2000)。

一方、東アジア、とりわけ中国では歴史時代にはいるとブタの記述が歴史史料のなかに散見できる。数多くある経書の中でも比較的初期に書かれた『周礼』中には六牲や六畜という用語が見られ、ブタが家畜動物として古代中国社会において利用されていたことが理解できる。岡村秀典は『周礼』や『礼記』といった儒教経典の記述から、王や諸

侯の階層はウマ、ウシ、ヒツジの牧畜を組織的に行ない、なかでもウシの飼養と供犠をもっとも重要視していたのに対し、下級貴族もしくは庶民層の間ではもっぱらブタが供犠に用いられており、農業の副業としておもにブタの生産と消費とを行なう農村部に対して、ウシの消費を優位とする都市社会が殷代以降発達し、家畜動物の消費の形態は社会階層によって異なっていたことを指摘している（岡村 2003：22-23, 69-70）。

本稿では歴史的、地域的な背景のもとで、様々な社会的位置づけをされてきたブタが、現代社会において地域社会において果たしている役割について民族誌的記述を行うものである。具体的には中国福建省の客家の人々のコミュニティで行われているブタ飼養をてがかりに、象徴財としてのブタの役割が受け継がれていることについて概述する。次に、イベリア半島で行われているイベリコ豚の飼養について紹介し、伝統的な家畜飼養のありかたが地域文化を示すものとされていることについて概述していく。

2. 現代中国の農村部におけるブタ飼養—福建省客家の事例

ブタの飼養と消費に関わる調査を行なったのは、福建省連城県姑田鎮である。姑田鎮は廈門から自動車でも8時間ほどの内陸部に位置し、1500mほどの丘陵地帯のくぼみに海拔およそ4～500mの盆地状に広がっている。年平均気温は約18度、年間降水量は1600～1900mmである。姑田鎮全体の面積は約325平方キロメートル、人口は約2万人でその大半は客家系の人々である。客家とは一般に唐代から元代にかけて華北の中原地域から移住してきた人々の子孫とされており、現在は主

に湖南省、福建省、広東省などに居住している。

姑田鎮で現在行われているブタの飼養の目的は食用個体の売買ならびに食肉への加工であり、皮や乳の利用は行われていなかった。大規模な養豚場は姑田鎮には存在せず、最も大きな規模で飼育している場合でも繁殖雌が10頭前後という状況であり、基本的には一般家庭において数頭の規模で飼育されていた。筆者が調査した時期に飼育されていた品種は、種雄がデュロック、ランドレース、大ヨークシャーであり、繁殖雌は槐猪等の地方品種系の黒色個体、ランドレース、長大とよばれるランドレースと大ヨークシャー種との交雑個体、大ヨークシャーと地方品種系の個体との雑種であった。これらの種雄と繁殖雌との間に生まれた個体のうち、雄の個体はすべて食用となり、種雄に用いられることはなかった。雌の個体は、種雄である大ヨークシャーと地方品種との間に生まれた一部の雌が繁殖雌として利用される以外はすべて食用とされていた。

ブタの飼育形態

姑田でのブタの飼育形態は、繁殖を行なう飼育と、購入したブタを飼養してから売却する2つの形態に大別できた。繁殖を行なう飼育は、繁殖雌を所有する飼育、種雄のみを所有し交配を主に行なう飼育、種雄と繁殖雌の両方を所有して繁殖を行なう飼育に細分化された。姑田鎮の中堡村に居住するJA家の家庭における2005年1月の時点でのブタの飼育状況を例にとってみる。JA家の家族構成は20代後半の夫婦とその子供、夫の母親の3世代が同居した中堡村では標準的な家庭である。筆者の調査時、JA家では夫婦が繁殖雌1頭と雄ブタ（去勢済）3頭、雌ブタ（避妊済）1頭、

雌ブタ2頭を所有していた。JS氏の所有している繁殖雌は5年ほど前に購入した本地母種で、体重は125kgであった。2004年の9月末の出産が6度目であり、この時の出産では12頭の仔ブタが生まれた。そのうち8頭は生後まもなくまとめて約2000円で売却されていた。残り4頭のうち2頭の雄は去勢しており、成長させてから売却するということがあった。2頭の雌は繁殖雌にする予定なので、去勢は行なっていなかった。繁殖雌が死んだ場合、食用にはせずに廃棄するということがあった。繁殖雌は肉質が悪いと同時に蓄積した老廃物が人間にとって有害であると考えられているため、売り物にならないし自家消費も避けるということであった。JS氏はこれらのブタとは別に他人から購入した2頭のブタを飼育していた。これらの2頭は30kg程度のときに合わせて800元ほどで購入したもので、いずれの個体も去勢されており、やはり成長させてから屠畜し売却する予定であった。

ブタの屠畜と流通

姑田における仔ブタの売却は所有者が直接市場において売却することが少なくないが、成長したブタを食肉にして売却する作業には屠夫とよばれる専門者が従事していた。屠夫がブタを屠畜し、豚肉を販売する際には基本的にはブタの所有者からブタを購入し、それを売却するという形式をとっていた。屠畜されるブタは前日までに解体作業を行う場所に運び込まれ、隣接する囲いに入れておかれる。解体作業は1頭のブタを屠る場合は早朝4時ぐらいから始まり、2頭、3頭と売却する頭数によって、ほぼ1時間、作業時間が早められていた。特に、春節や元宵節といった時期は屠

畜する頭数も増えることから、深夜の2時過ぎから作業を開始することも珍しくなかった。

市中での食肉の販売は6時くらいから開始され、定期市、主要幹線道路沿い、町中の3箇所で行なわれていた。主要道路と市中での販売に際しては売る場所に特に決まりや制限はなく、屠夫達は大きな荷台がついた食肉販売用の自転車で移動しながら、肉の売却を行っていた。豚肉の購入は、肉の小売業者や食堂経営者がまず仕入れに訪れ、一般客が訪れるのはおおむね8時過ぎくらいからであり、他の食材と一緒に購入していくことが多かった。豚肉は部位によって価格が異なっていた。解体作業やその後の市場での切り分け作業もこの部位を分けるような形で行なわれていた。屠夫が切り分けていく単位として認識していたのは、肥肉（脂身）、瘦肉（赤身）、猪肚（胃）、猪心（心臓）、猪腰（腎臓）、猪肺（肺ならびに気管支）、小腸、大腸、前肢、後肢、吻（吻部）、耳、その他の顔面、脳、舌、排骨（肉付きあばら骨）であった。

去勢と避妊

姑田においてはブタの去勢は雄、雌両方ともに行なわれていた。雄ブタの去勢は生後20日から1ヶ月の間に行なうものであり、比較的簡単な手術ですむことから、雄ブタの所有者自らが行なうことが多かった。去勢を専門に行なう人間に依頼する場合は、1頭あたり1元と非常に安い金額となっていた。これに対し、雌ブタの去勢は一般の人間には難しく、施術を専門にする人間に依頼するのが一般的であった。雌ブタの去勢に要する費用は10～20元とされていた。去勢を施術する人間は「閹猪客」と呼ばれており、姑田では中堡に

2人存在していた。JA氏が行っていた雌の個体の避妊の手順は次の通りである。まず、豚舎からブタの耳をもって引きずり出し、体の左側が上になるように寝かす。両足を脚架でしばり、それを自分の左足でふみ、右足ではブタの耳を踏みつけて、ブタを固定する。次に右わき腹の後肢の付け根の部分を、最初に閹割刀で毛をそぎ、その部分に長さ2cmほどに切れ目をいれる。次に腹部に指をいれて輸卵管を探し出し結紮した後に、閹割刀で卵巣を切り取る。卵巣は2個あるため、同じ作業を繰り返した後、切れ目を縫合する。最後に傷跡に歯磨き粉をぬりつけて去勢は完了した。切り取られた卵巣はそのまま廃棄され、人間による利用はなかった。

財貨と食用資源の二面性

現在の姑田におけるブタの飼養は基本的には、仔ブタを繁殖しそれを売却するという形態と、仔ブタを購入しそれを肥育、成長させたくて食用のために売却するという形態の2通りの方法をとっていた。ブタを自家消費するために飼養する家庭はなく、豚肉は現金で購入するものという位置づけが浸透していたと言ってもよい。現金収入の増加により、かつての自給経済から市場経済への移行は、個々の家庭における豚肉の消費やブタ飼養のありかたを変えてきた可能性は高い。ブタを飼養する、もしくは所有するという行為が経済的な豊かさを示していた時代から、現金をもつということが豊かさを示す時代に移行していくなかで、ブタが食資源の性格を強めていったことは間違いないであろう。それを示す一つのことがらと考えることができるのが目的に応じたブタの分類とそれに対応したブタの呼称である。食用に売却

するために去勢された個体は「菜猪」とよばれ、雌雄が同じ豚舎で飼育されていた。「菜猪」は食用の肉になることが前提の個体であった。逆に「菜猪」にならなかった種雄の「公猪」ならびに繁殖雌の「母猪」は食用とされることはなく、繁殖のための個体と食用のための個体の区別は、人間側の利用の実態とそれに応じた名称が一致していたことになる。こうしたブタに対する呼称の使い分けは食用資源としての性格を強調した現象だと考えられる。一方で、人々の生活の中には必ずしも食肉としての利用だけでは説明できないブタの意味づけが見られた。例えば、婚姻に際して支払われる婚資の一部に豚肉が含まれることは中国の農村社会における慣習によく見られることであるが、調査地では現金で婚資を支払う場合、贈るべき量の豚肉に相当する対価が支払われることがしばしばあった。例えば、屠夫のJS氏は自分の婚姻に際して妻の家にブタの腿肉24斤(約12kg)を贈っているが、もし、現金で婚資を支払う場合には24斤に相当する市価の金額を妻の実家に渡すという具合である。現金に示された数字よりも豚肉の量の数字が重視されていることは、いまだ豚肉が現金にまさる意味づけを社会の中で保っていることをうかがわせる一つの例と言える。

3. イベリア半島におけるブタ飼養：イベリコ豚のブランド化

イベリコ豚はイベリア半島から北アフリカの西部地域に分布してきた地域品種である。いくつかの系統が認められていて、共通している特徴としては、毛色がこげ茶から茶褐色であり、吻部は比較的長いことがあげられる。体高は55～70cm、

体長は1.2～1.5mであり、出荷時にはおおむね150kgまで成長させている。

現在の畜産では、生後1年半から2年で屠畜される。約110日間の妊娠期間で産仔数は7～8頭、1年2回の出産である。生後60日間は母子飼育が行われ、母乳、穀物粉を主な餌とする。生後60日以降は母ブタと離して飼育し、80～90kgまでは囲いこみの飼育を行い、餌は穀物粉が中心となる。飼育上で注意がはられるのが、この時期にはあまり骨太にさせず、臀部の肉付きを極力抑えることである。これは、イベリコ豚飼養において最も重要とされる生ハム生産を効率的に行うためである。

La Montanera

イベリコ豚の飼養においてもっとも特徴的であるのが、モンタネラ (La Montanera) とよばれる、12月半ばから4月半ばまで行われるドングリ放牧林における飼育である。基本的にこの時期はブタはドングリ林に放牧され、ドングリや草を自分で採食する飼育方法がとられる。約3ヶ月で150kg以上まで一気に太らせることで、良質のハムの製造が可能とされており、屠畜後、後脚部分は所定の過程をへて18ヶ月間、熟成された後、Jamon Iberico bellota という「ドングリで育てたイベリコハム」という品質認定が得られる。ハムとなるのは去勢オスであり、メスは基本的に繁殖メスとして利用されている。また、種オスは、デュロック等の他の生産品種が用いられる。

ドングリ林におけるブタの放牧飼育はヨーロッパにおいて古くから行われてきたことが知られている。例えば、15世紀に編まれた『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』(Les Très Riches Heures

du Duc de Berry) では11月の暦にあたる部分にブタがドングリを林の中で食べさせられている様子が描かれている。こうしたドングリを用いたブタの飼育は、穀物生産の増大のために農耕地が拡大したことにより森林の面積が減少していったことに伴い衰退していった。一方で、大航海時代を経験したスペインやポルトガルにおいては、長距離航海時における食糧として乾燥肉の需要があり、ドライハムの生産がイベリア半島南部で行われていた。現在のイベリア半島南部のアンダルシア地方においてハムの生産が慣習的に行われてきた一つの要因として考えられている。また、これらの地域は地中海性森林である dehesa が発達しており、その優先種である常緑櫟 (Quercus ilex) ならびにコルク櫟 (Quercus suber) は櫟類のドングリの中でも栄養価が高く、ブタの放牧飼育に適した環境が整っていた。結果的には、現在のヨーロッパにおいてブタの放牧飼養がイベリア半島のみで継続して行われてきた。

原産地証明 (D.O.) の役割と生産者との関係

慣習的なブタ飼育は1960年代以降の工業化促進と農業の衰退、1986年におけるスペインのEC加盟によって変化が生じるようになった。当時、ハム製造は産業化されておらず、小規模なハム製造会社が地域に存在しており、経済競争力をつける必要性が生じた。これらの会社数社が合同で、D.O. の設立を協議した。すなわち、それまでは地域の産業として地域的な消費が中心であったハムを地域ブランド化して、外部に市場を求めていくという方向付けがなされたと言ってよいであろう。この背景には、60～70年代にワインの品質保証のD.O. が設立されていたことがあった。現

在、スペインにはイベリコ豚の原産地証明は5ヶ所の地域に設けられている。

イベリコハムの地域ブランド化ならびに原産地証明による品質保証の表示化は、中小企業にとって、ハムの品質が保証されることにより価格の安定というメリットがあった。一方で、原産地証明を得るためには、煩雑な検査とそれにとりもなう検査コストを要することから、自社ブランドを確立した企業が原産地証明を脱退するという動きも生じている。

また消費者には、イベリコ豚やドングリハムの生産過程はそれほど知られてはおらず、先述したモンタネラによって育てられていないブタをドングリで育てられたイベリコ豚であるとして購入、消費する状況もスペイン内外で生じているのが現状である。こうした状況は地域ブランドとしてのイベリコ豚の価値を損ねることも意識され、dehesa という自然環境や慣習的な飼養を紹介するための博物館建設が、この5、6年各地で進められていることも注目に値する。

地域で育てられている家畜品種に特別な呼称が与えられ、ブランド化する現象は世界の各地で認められるが、イベリア半島におけるイベリコ豚のブランド化は食糧資源としての家畜動物だけでなく、地域の歴史や社会をとらえたかたちで進められているのがその特徴と考えることができるであろう。

4. まとめ

本稿では中国福建省とイベリア半島の事例を通して、商業的な食肉の生産が行われ、人間が動物を屠る光景が希薄になっていく現代の食肉生産、流通事情の中で、文化的な所産としての家畜動物の存在とその飼養が世界の各地で見られるということを紹介した。こうしたブタは経済的、イデオロギー的、宗教的、人間社会のあらゆる側面において深く関わってきた家畜動物である。ブタをめぐる人間の態度には、積極的にその利用を促す正の象徴化と、接触すらも禁じる負の象徴化の両方があり、それらは時には混在してきたのである。これらを理解するためには、実際にブタが人間によってどのような扱われかたをしているかについて個々の事例を検証していく必要がある。

参考文献

- ダネンベルク, H・D 1955.『ブタ礼賛』(福井康雄訳) 博品社
- ファーブル=ヴァサス, C 2000.『豚の文化誌—ユダヤ人とキリスト教徒』(宇京頼三訳) 柏書房
- 野林厚志 2007.「中国農村社会におけるブタの多面価値」印東道子編『資源人類学 07 生態資源と象徴化』pp. 247-291 弘文堂
- 「ブタが支える地域まるごとミュージアム」『月刊みんぱく』9月号: 14. 2009.
- 岡村秀典 2003.「先秦時代の供養」『東方学報』第七五冊, 1～80